

安藝文学 広島県

六十年の伝統雑誌

この二、三年間におそわれた異変をどうして並みのものと云えようか。災厄の「平成」と総括されるのと歩調を合わせたような。そうちやかして仕舞おうかな。

抑も、昭和三十三年（一九五八）五月創刊、爾来（じらい）の消長に波だちは当然として、激変とみなすほどの危機的な状況に直面したことなく、したがって傍目には安定した、息のながい集団と見えたにちがいない。事実、戦前・戦後の広島において、散文の分野で長期にわたる活動を維持し続けたサークルは他に例を見ないのである。

尤も、持続こそ力と自負し、誇るには足りない。ただ、結末の綻びが縫れみだれたり、四散の憂き目は見なかった。であれば、確かに独自の成り立ちを築きあげたのであった。

昭和三十年代後半は、全国的な文運活発化の上げ潮にあり、地域において個々の集団が競い合い、あるいは連帯の行動を誘い、反目と批判の自由をわが糧になしえる最善の時代であったと顧みる。

それは不思議なほど熱気にみちた時期でもあって、「文

芸年鑑」（年刊・日本文芸家協会編・新潮社刊）に登載、記録された同人誌関連の記事にみる、主な誌名のほとんどがかつての気運のなかで生まれ、現在に続いているのを一瞥するだけで、その時期の熱気のほどが容易にうかがわれる筈である。

「安藝文学」もこの時流に乗り、数名の知己が寄り合った喫茶店の一隅から始まった。

半年後、創刊号の薄い冊子の束を風呂敷包みにして、本通り筋の古本屋へ赴いた。十冊ほどなら預かってよい、納品書を出せ、といった返事を得、最寄りの文具店で「納品書」綴りを買ひ、「納品」を遂げたときの有頂天ぶりは、永いあいだの嬉々たる伝聞となったものだ。（それによ、短期間で完売を見届けたんだ、ヤル気を見

▲私宅を会合の場にした一回ぎりの場面



煽られちゃったね

なによりも長幼序列の排斥に徹した方針のもと、相互の対等を旨とする拡大の方策に寛容だった。（地元の新聞が発刊のたびに、気恥ずかしいほどのスペースでもって、喧伝し、月を追うごとなかまが増えたってわけ）

年二号の刊行を目標に掲げながら、結果的にはそのような実績を積みかねたとはいえ、また定期的な発行の墨守にルーズだったのは、それなりの弁明をあげ得るにせよ、つまりは自作の活字化を最優先にはしない、暗黙のきまりを互いに認め合う寛容を無下にはしなかったからである。

これらの事柄は、広島地域の、たとえば昭和三十年代後半から四十年代にかけて創刊を競い合ったグループの短命ぶりを逆照射するだろう。

なかには、主宰格の人物が是認しなければ掲載・発刊しない方針を維持し、このため同人たちは別の集合体をつくって創刊、母体の誌名は自然消滅、といった事例もある。

定例の集会のほか、本誌とは別に「会報」の発行を続けた。今年三月現在で650号に到達。B4サイズの四頁を基本に六頁、八頁など時に応じて伸縮自在なスペースが他地域に居住する同人間の交流・発言の場として活用され、また意志疎通の持続がグループ運用にもたらした裨益（ひえき）を挙げておかねばなるまい。



毎月発行の「会報」は、遠隔の地にある同人たちに待望される音信の役かねており、メール発信を利用できない向きにもその定期発行が必須のルートになり得ていることへの留意が「結束」の保持と無縁ではないはずだ。

こうしてひとつのエポックを劃したのが、『選集・安藝文学』第一集の刊行だった。ハードカバーの単行本、長期保存を見込んだ企画であった。四〇〇頁。同人二十七名の小説・エッセイ選集。平成二十五年十二月（溪水社刊）作品は、自選をも受け入れながら、次のような構成に編纂された。

小説の部
第一部 郷土史への視座
第二部 遠きしるべに
第三部 時空を超えて
第四部 情念のまなざし
ESSAYの部 十篇収録

この企ては、その後、継続の要望に添い、二集編纂の刊行企画まで進行、本誌刊行を優先するため、一時、先送りに置かれている。

創刊当時、一〇〇号まで出すというのが目標であった。

その数字は遙か彼方にかうかぶ陽炎の如きに見えたものだが、いま、八十八号の原稿を揃え、穴埋め等の処理が済み次第、印刷に入る見通しである。一〇〇号の数字がもう間近か、と改めて感に耽るのではなく、先途を急ぐ喫緊の日日を閲しているのである。

そこへ、近年の異変遭遇ときたのだった。定例の同人会后、二次会へ移動するのが常であったが、予約人員の減小に歯止めがからなくなかった。

転倒、膝を痛めて長期療養に入ったもの。こまめな健診にもかかわらず、癌が発見され、術後には全身転移、ついで早々と黄泉の国へ。認知症の徴候悪化、施設住まいのもの。まるで超高齢層のマイナス症候群一覽にも似た疾病に阻まれ……、無念なことに定期集會は一時棚上げ扱いの、これが異変の正体なれば、この頁に掲げる一葉の写真が昔日のいともご機嫌な面々のみを留めているのも、むべなるかな。

（岩崎清一郎）

安藝文学

同人会事務局

〒七三二・〇〇〇二 広島市東区戸坂山根2・10・25
TEL082・229・2869
Mail: akibun@songocn.ne.jp



某年の花見の帰り、いまはなきバー「とんがらし」に立ち寄って